高等学校「保育」の学習による学習者や周囲の変容と学習内容の検討

石川県立金沢伏見高等学校
教　諭　　河岸　美穂
（金沢大学大学院　教育学研究科　家政教育専攻）

問題の所在と目的

高等学校の３年間は生徒が自らの進路を模索し、自立に向けての独立心を形成していく時期である。この時期に学習したことや経験したことが、自己の進路を考える際やその後の人生に少なからず影響を与える。自らの興味・関心に応じた内容が中心となる大学の学習と違い、高校は、生徒の興味・関心に関わらず、ともに共通の内容を学ぶ最後の機会である。「学び」には興味・関心が低くても、必要があることも多い。特に、少子化が進み、児童虐待や育児放棄などが多発している中、子どもについて理解し、乳幼児に適切に対応できる力をはぐくむことは、親になる、ならないに関わらず人として大切なことである。

そのためにも、高校生の乳幼児に対する興味・感心を高め、乳幼児の心身の特徴をより深く理解する効果的な学習内容が必要である。そこで本研究では、高等学校の家庭科の中でも、保育分野に焦点を絞り、この分野を学習した後の学習者の意識変容の分析を通して、効果的な授業内容の検討を行いたいと考える。

また、生徒がともに学ぶ最後の機会である高等学校の家庭科の学習を通して、生徒の自己認知力や自尊感情を高め、自己理解や他者理解を深めることを目的とした学習内容の検討を行う。

方　　法

第１章　第１節～第３節　保育体験とグループ学習を取り入れた保育分野の学習内容の検討

2002・2003 年度の実践・分析より、保育体験とグループ学習の効果と課題を考える。保育分野学習後、保育体験後、グループ学習後に乳幼児に関する意識調査を行い、分析する。2003 年度はこの意識調査において、特徴的な回答をした高校生に聞き取り調査を行い、乳幼児に対する種々の感情が生まれた背景を探る。

第１章　第４節／第５節　保育体験における高校生の意識変化と保育体験についての周囲の意識

2004 年度の実践より、乳幼児に対する保育体験が高校生の自尊感情を高めることに役立つのかどうか、また高校生の社会的スキルの高低が乳幼児に対する感情にどのように影響を与えるかを調査し、分析する。それとともに、高校生だけでなく、幼稚園生や幼稚園教諭、参加した高校教諭等がこの保育体験で感じた印象を検討する。

第２章　高等学校家庭科「保育」の授業で活用した心理劇の効果と課題

2002 年の実践・分析より、心理劇を活用した「保育」の授業後、および３年後の学習者の意識調査から、心理劇が学習者に与える効果や課題等を考察する。

第３章　学習障害やＡＤＨＤなどの発達障害や児童虐待等を考える授業内容の検討

2005 年度の実践・分析より、人間の認知の仕方には個人差があることを踏まえ、児童虐待などの二次障害を予防するために、ＬＤ（学習障害）やＡＤＨＤ（注意欠陥多動性障害）などの発達障害について理解と共感を深める授業内容を検討する。

第１章　第１節～第３節保育体験とグループ学習を取り入れた保育分野の学習内容の検討

１　目　的

少子化が進み、児童虐待や育児放棄などが多発している中、子どもについて理解し、乳幼児に適切に対応できる力をはぐくむことは大切である。しかし、授業の中で乳幼児のことを学ぶだけで、この能力を育てることは難しい。そこで、乳幼児について学習した後、実際に子どもと関わる保育体験学習を通して興味・関心を高めたいと考える。、これまでの実践事例からも、家庭科教育における保育体験の成果が蓄積されており、保育体験学習によって生徒は保育の意義を理解し、多くの気づきを得ることが明らかにされている。

そこでさらに、この体験で得た効果の定着を図るために、保育体験の様子をグループで話し合い、まとめ、発表する、グループ学習を行った。これによって、より深く乳幼児の発達の様子を理解させたいと考えた。また、保育体験に対して、特徴的な回答をした生徒に聞き取り調査を行った。

本研究では、保育体験前と体験後、グループ学習後の質問紙による意識調査および聞き取り調査を考察し、保育体験学習を含めた保育の授業の課題を検討することを目的とした。

２　方　　法

2003 年に県立高校普通科２年生 116 名（男 25 名、女 91 名）を対象に保育体験とグループ学習を取り入れた保育分野の授業を行った。その中で、保育体験前と体験後、グループ学習後にそれぞれ乳幼児や保育学習に対する意識調査を行った。また、意識調査において特徴的な生徒を対象に聞き取り調査を実施した。

（１）保育分野の授業内容

題　材	時 数	学　習　内　容・ね　ら　い	学　習　活　動・教　材
① なぜ保育を学ぶか	2	どうして保育内容を学ぶのかを考える。 ヒトが社会的な人間になるためには環境と教育が重要である。親になるためには、多くのことを学習する必要があることを知る。 母性と父性は本能かどうかを考える。	・アヴェロンの野生児 ・狼に育てられた「アマラ・カマラ」 ・「ジーニー」 ・幼児教育を考える
② 子どもの発達	6	生命の尊さと母体の健康管理の大切さを学ぶ。心身の発育、発達の特徴を知り、人間の一生における乳幼児期の重要性を理解する。	・ビデオ「生命の誕生」 ・ビデオ「初めての冒険」 ・プリント・保育人形
③ 親の役割と保育	5	乳幼児期においては、特に親（子どもを保護する特定の人）の関わり方が子どもの人間形成に重要であることを理解する。児童虐待等を取り上げ、その原因と周囲の支援や社会のあり方を考える。	・「動物の子育て、人の子育て」 ・デズモンド・モリスの考え ・ビデオ「密林にチンパンジーの心をみつめた」「脳と心」・児童虐待の新聞記事
④ 保育体験	4	実習の目的、ねらい等をグループで考える。子どもと関わることによって、乳幼児の発達の様子を理解する。記憶を定着させるために、写真を撮る。	・オリエンテーション ・保育園・幼稚園で交流する。 ・活動の様子を撮影。 ・学校で記録ノートを書く。
⑤体験の記録作成	4	PC を使って、自分達が交流した子ども達の記録を作成し、より幼児の特徴を認識する。	・実習記録と写真をもとに話し合う。 ・プレゼンソフトを活用。
⑥保育体験の発表とまとめ	2	皆の前で発表することで、認識を深める。自分たちや他の班の発表から、乳幼児の発達の特徴を知り、より深く乳幼児の発達の様子を理解する。	・コンピュータとプロジェクタを使用し、発表会を行う。 ・発表を聞いてわかったことや評価を書く。

３　結果と考察（１）乳幼児への興味・関心や体験することに対しての否定的な回答は、体験前と比較して体験後、グループ学習後と学習が進むにつれて減少した。たとえば、乳幼児に興味・関心があるかという質問について、否定的な回答の割合が体験前は 23%であったが、体験後は 8%、グループ学習後は 6%となった。**図１**（２）幼児理解についても同様であり、幼児の気持ちがわからないという回答が体験前の43%から、体験後は25%、グループ学習後は22%であった。**図２**（３）乳幼児に関するイメージの自由記述の語数は、体験前16語、体験後27語、グループ学習後27語と変化し、具体的な記述が増加した。また、グループ学習後には乳幼児の年齢による違いを記述したものが見られた。**表１**（４）乳幼児の成長を知ることに対しては、大切だと答えた割合が体験前76%、体験後85%、グループ学習後85%であり、体験に関わらず学ぶことの重要性を認識していた。（５）マイナスイメージについては、幼児がうるさくするとイライラすると回答した割合は、体験前の44%から体験後は5%に減少したが、グループ学習後には9%と体験後と比較して増加した。**図３**以上のことから、乳幼児に対する興味・関心や理解を深めるために、保育体験とグループ学習は有効であると考えられる。しかし、マイナスイメージについては、グループ学習後に若干であるが戻る傾向にあった。この要因を検討し、授業内容を考えていくことを今後の課題としたい。

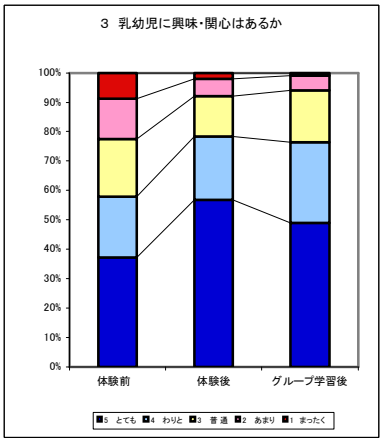

図１　興味・関心

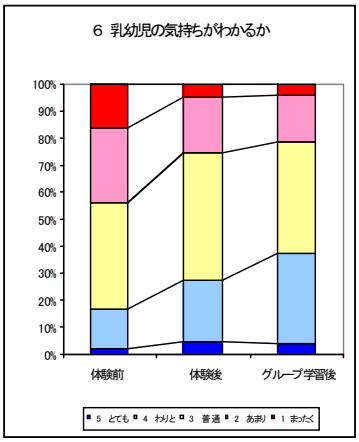

図２　幼児理解

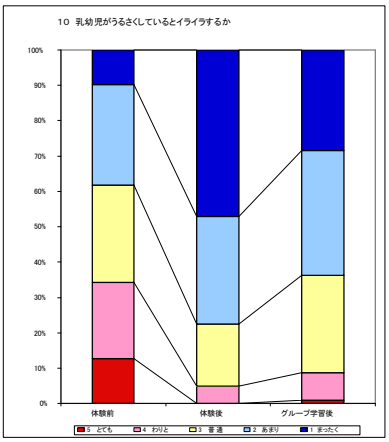

図３マイナスイメージ

表１　乳幼児に関するイメージの自由記述

（人）	体験前	体験後	G学習後
かわいい	38	47	52
元気・活発	31	55	52
明るい・明るく	4	7	4
素直	0	4	14
しっかり	0	1	10
無邪気	0	4	2
純粋	0	3	3
楽しかった	0	12	5
小さい・小さく	10	6	4
人見知り	0	8	6
泣く	6	5	7
やんちゃ	6	1	1
大変	3	0	4
さわがしい	7	3	1
わがまま	1	1	5
違う・違い	0	0	11
語数平均	１６語	２７語	２７語

（＊注　グループ学習をG学習とする）

４　まとめと今後の課題

①　乳幼児に対する興味・関心や理解を深めるために、保育体験とグループ学習は有効である。

②　保育体験とグループ学習は有効であるが、家庭基礎では保育体験やグループ学習の時間を持つことが難しい。そこで、総合的な学習の時間とのリンクを図り、保育体験実習の時間を確保する必要がある。

③　マイナスイメージについては、時間の経過とともに戻ることが分かった。

④　マイナスイメージを持っている生徒とじっくりと話すことの大切さを感じた。

⑤　これらの要因を検討し、より有効な授業内容を考えることを今後の課題としたい。

第１章　第４節／第５節

保育体験における高校生の意識変化と保育体験についての周囲の意識

１　目　的

少子化が進み、児童虐待や育児放棄などが多発している中、子どもについて理解し、乳幼児に適切に対応できる力をはぐくむことは大切である。先行研究より、乳幼児に対する興味・関心や理解を深めるために、保育体験をすることは有効であることがわかっているが、家庭科の単位数が減少している中、家庭科の授業の中で保育体験の時間を確保することは難しい現状である。そこで、幼児に対する興味・関心や理解を深めるとともに、生徒の自己理解を深め、進路選択の一助になることを期待して「総合的な学習の時間」において幼児と接するための学習と保育体験を行った。この体験が生徒の自尊感情や社会的スキルを高めることに役立つかどうかを考察することと、高校生だけでなく、参加した高校教員、保育士、幼稚園児の意識調査から、保育体験の有効性と課題を検討することを目的とした。

２　方　法

2005 年に県立高校普通科２年生 273 名（男 71 名、女 202 名）を対象に総合的な学習の時間において幼児と接するための学習と保育体験を行い、保育体験学習前と体験後に乳幼児や保育体験に対する意識と、自尊感情と社会的スキルに関する調査を行った。また、保育体験後に生徒と共に参加したクラスの担任・副担任 14 名、受け入れ先の保育士 18 名、幼稚園児 365 名に意識調査を行った。

３　まとめと今後の課題

（１）自尊感情は保育体験によって高まることがわかった。

表２　高校生の自尊感情

	n	平均値	標準偏差	t 値
体験前・自尊感情	２６５	22.63	5.58	３．４０***
体験後・自尊感情	２６５	23.44	6.03	

***Ｐ＜．００１

（２）自尊感情が高い群ほど、子どもに関わる自信が高かった。

（３）社会的スキルは体験前と後において有意差は見られなかった。短い体験時間では社会的スキルの変化までは難しいと考えられる。しかし、社会的スキルの高い生徒群ほど「子どもに対する興味・関心」「関わる自信」「成長を知ることの大切さ」が高く、子どもに対する「マイナスイメージ」が低いことがわかった。

（４）「子どもに対する興味・関心」「マイナスイメージ」「成長を知ることの大切さ」「子どもと関わる自信」どの項目においても保育体験による効果が見られた。

（５）わくワーク体験等、今までに経験がある生徒の「子どもに対する興味・関心」は高かった。

（６）女子の方が「子どもと関わる自信」が高かった。

（７）幼稚園児のほとんどが高校生との交流を肯定していた。

（８）幼稚園教諭と高校教諭の感想から異年代が交流する意義が分かった。

（9）総合的な学習の時間で行ったため。事後の学習ができない。保育体験の効果の定着を図るために、ＬＨ等の時間を活用し、高校生から幼稚園児へ手紙や作品を作り送る、幼稚園児からも絵等の作品を作ってもらう等の工夫をすることが大切だと考える。

第２章　高等学校家庭科「保育」の授業で活用した心理劇の効果と課題

１　目　的

選択「保育」の授業では、乳幼児や保育に関するより詳しい知識を習得することだけでなく、乳幼児とより適切に関わるために具体的な問題を解決できる力をつけることが求められる。そこで、心理劇を活用し、乳幼児を含めた他者を演じ、そこで気づいたことを話し合うことを通して、自己と他者を客観的にとらえ、これから遭遇する課題に適切に対応できる力を養えるのではないかと考えた。本研究は、高等学校家庭科の選択「保育」において、心理劇の授業を行った時の感想と授業を行ってから3年後の感想から､授業における心理劇の有効性と課題を検討することを目的とする。

２　方　法

2002年に県立高校普通科3年生12名（男1名、女11名）を対象に選択「保育」の授業の中で、乳幼児の心身の発達と特徴、親の役割と保育について理解を深めることを目的として、心理劇を取り入れた授業を３時間（３回）行った。3 回の心理劇後の感想文から、感想文中の言葉の変化と、「親の役割」「子どもへの具体的な対応の仕方」「乳幼児の心身の発達」に関する記述の変化を分析した。3年後の感想から覚えていること、感じたこと、心理劇に対する意見、感想を分析した。

３　結果と考察

授業後の感想では、回を重ねるごとに気づきが増えている。最初は楽しかった、恥ずかしかったという自分自身の感想であったが、回を重ねるごとに、子どもにたくさん話しかける、子どもに平等に接するなど､「親の役割」に関する具体的な記述が増えている。どの回においても半数以上の生徒が「子どもへの具体的な対応の仕方」を記述している。心理劇を用いることで「子どもへの具体的な対応の仕方」が考えやすいことがわかる。心理劇を演じることにより、「親」や「保育士」の視点や「周囲」や「環境」「気づき」の重要性を理解し、「親の役割」や「子どもへの対応の仕方」を考えることができたことが明らかとなった。

他者を演ずるという自発的な活動を通しての気づきから、自己と他者を客観的にとらえ、他者を理解することや問題に適切に対応しようとする姿勢が見られ、心理劇の効果が見出せた。また、心理劇を取り入れることで、友人たちと意見を出し合い、ともに考えてつくり上げていく学びの楽しさを実感していた。しかし、演じていた当時も今も心理劇を演じたことは楽しかったと思っているが、3 年後では、多くの生徒がこの授業のことを具体的に記憶していなかった。また、3 回の心理劇ともテーマに関する内容の記述はみられたが、そのテーマ以外の心身の発達に関する記述はみられない｡心理劇だけでは､｢乳幼児の心身の発達｣全般を網羅して理解することは難しいと思われる。

これらのことより、心理劇を授業でより効果的に用いる際の留意点として、

①「子どもへの対応の仕方」を具体的に考えられるテーマを設定する。

② 乳幼児の心身の発達の一部を学ぶことで発達全体への関心が広がるテーマを設定することが大切である。また、保育体験等と組み合わせることによって、「乳幼児の心身の発達」を学ぶことへの関心を高めることができると考えられる。

③学習のねらいに基づいて、事前、事後学習を組み合わせて心理劇を設定するとより効果的である。

④本研究では、3 回心理劇を行ったが、心理劇は 1 回だけでなく、複数回行うことにより、よりその効果を高めることができる。1 回では、心理劇を行ったことに対する感想に留まる傾向がある。少なくとも 2 回行うとよい。

⑤心理劇を演じた後に、演じた様子を撮影したビデオを視聴し、その時の気持ちを振り返ったり、子どもや大人の言動の意味を再度考えたりする活動を加えることで、他者への対応の仕方をより深く学ぶことができると思われる。

第３章　学習障害やＡＤＨＤなどの発達障害や児童虐待等を考える授業内容の検討

１　問題の所在と目的

2002年に文部科学省が、全国５地域の公立小学校（１ー６年）及び公立中学校（１ー３年）の通常の学級に在籍する児童生徒41,579人を対象として行った調査によると、知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難があると担任教師が回答した児童生徒の割合は、６．３％であった。１クラスに１ー2人はＬＤ・ＡＤＨＤ等の軽度発達障害があることになるが、日本では、まだＬＤやＡＤＨＤ等の知見が広まっておらず、対策も遅れているのが実情である。

「先生の指示に従わず自分勝手に行動しがちな子、注意が散漫で先生の話しを最後まで聞けない子、授業中に課題に取り組もうとしない子」として、周囲から特別視され、いじめの対象になってしまう場合もある。周囲の理解の不十分さによる対応の不適切さによってセルフ・エスティームが低下するなど、二次的障害も生じやすく。反社会的な問題へと進行してしまうこともある。

周囲はこのような子どもたちの問題に早期に気づき、子どもたちを仲間の中で育てていく工夫をしなければならない。最近では「賞賛」や「励まし」などを中心とした関わりによって、当人の達成感を感じさせる体験や、自信や自尊感情を育む試みが効果的である。

保育分野においては、乳幼児期の親子関係の重要性が取り上げられており、子育てや家族の人間関係が子どもの発達や人格形成に大きな影響を与えることを学ぶことになっている。しかし、軽度発達障害などの子どもの特徴については学ぶ機会がない。この特徴について理解することによって、将来、子どもやこれらの特徴がある他者と関わる時に、より適切に関わることができるようになり、児童虐待等の減少につながるのではないかと考える。また、人にはさまざまな特徴があることを知ることによって、他者理解はもちろんのこと、自己理解が深まることも期待した。

しかし、「障害」という概念について、わが国における語彙としての使用をみるときわめて未分化、包括的であり、われわれの歴史や文化が国際的な水準からみて必ずしも成熟した段階に達していないことから、これらの内容を生徒に伝える場合、差別等につながらない配慮が必要である。

本研究では、軽度発達障害の子どもたちへの理解を深め、望ましい支援の在り方を考えるために、どのような授業内容が良いかを検討し、授業後の生徒の感想からこの授業の効果と課題を考察することを目的とした。

２　研究の内容と方法

2005 年度に県立高校・普通科３年／普通コース 26 名（男 4 名、女 22 名）と普通科３年／人間福祉コース女子 18 名を対象に選択科目「発達と保育」の中で、ＡＤＨＤやＬＤなどの発達障害の特徴を理解し、これらの特徴がある子どもたちに適切に対応する方法を考えることを目的として、ＬＤの疑似体験等を取り入れた授業を行った。授業後の感想文の内容を分析し、この授業の効果と課題を検討する。それに即して生徒の感想文の内容を分析し、表４のように分類した。

表４「授業でわかったこと」と「授業で思ったこと、感じたこと」のアフターコーディング

	１　ＡＤＨＤ／ＬＤについての理解			２　対応の仕方の理解			３　当時者への感情			
	１－１特徴の知識	１－２当事者の気持ち	１-３社会の状況	２-１褒める	２-２生かす	２－３知識の必要性	３－１かわいそう	３-２すごい	３－３差別はだめ	３－４自分と同じ
27	○			○				○		○
28	○	○		○	○			○		○
29	○	○		○	○					
計	１７	４	１	１４	５	６	０	３	０	２

＊　○印は感想文中に標記のカテゴリーの記述がみられたことを表す。
＊　左端の番号は生徒を表す。
＊　最後の計は記述がみられた生徒の合計人数を表す。

３　結果と考察、研究のまとめ

（１）ＡＤＨＤ／ＬＤについての理解

①　知識の理解

普通コースの生徒に対して、５０分の授業を１回行った。「つまずき」がある子、特徴がある子という説明にとどめ、ＡＤＨＤ／ＬＤの語句や「障害」という言葉は使わなかった。言葉の説明は行わなかったが、感想文の内容「授業でわかったこと」「授業で思ったこと、感じたこと」の分析から、この授業の１つめのねらいであったつまずきについては多くの生徒が「障害」としてではなく、個々の特徴として肯定的に理解できていた。人間福祉コースの生徒に対しては、５０分の授業を３回行った。ＡＤＨＤ／ＬＤの語句を説明し、対応の仕方を具体的に提示するなど充分に時間をかけたこともあり、ほとんどの生徒の感想文の内容にＡＤＨＤ／ＬＤを具体的に理解する記述がみられた。

②　具体的人物の提示の有効性

失読症であるトム・クルーズの事例は生徒に強い印象を与えていた。感想文にも 14 名（44 名中）の生徒が彼の名前を記述している。台本が読めなくても、それを別の能力でカバーしていることに対して、「すごい」「尊敬する」とこれらの特徴をより肯定的にとらえており、興味・関心を高めることにおいて有効であった。

③　疑似体験の効果

「そのような人のものの感じ方を疑似体験することができて、とてもいい経験になった。もし、今後このような特徴がある人に出会っても、この授業で学んだことを生かして適切に接してあげたいと思う。」等、多くの生徒が疑似体験のことを記述している。今回行った疑似体験は、ＡＤＨＤ／ＬＤの特徴の理解を深める上で特に効果的であったと思われる。

（２）対応の仕方の理解、具体的事例（Ｗｅｂサイト活用）の有効性

２つめのねらいの対応の仕方の理解については、普通コースでは２６名中、１９名は記述していたが、７名の生徒に記述がなかった。一方、人間福祉コースでは、１８名中、１６名に「褒める」「達成感を与える」等の具体的記述がみられた。人間福祉コースの授業で活用した Web サイト「みてハッスル、きいてハッスル」のパズルゲームが効果的であったと思われる。このゲームでは、対戦者がたとえ、間違えたとしても、いっさい否定せずに、正解が出るまで待ってくれる。正解したらいろいろなパターンで褒めてくれる。師範して見せただけであるが、生徒は具体的でかつ、肯定的な対応の仕方を学ぶことができたと考えられる。授業時間が５０分と短くても対応方法について具体例を提示する必要性が感じられた。

（３）この題材を保育分野で行うことの有効性

この授業を実践して、生徒の反応の良さを体感した。普段より興味を持って授業に参加している生徒の様子をみることができた。生徒の感想文にも、「今日の授業を受けなかったら、一生私はこのような特徴を知らないままだと思いました。これからこのような人にいつ出会うかわからないので、自分の行動に気を付けていきたいです。」「この授業のおかげで、そういう人に出会った時に、心構えとか、対応とか、理解とか、出来る気がします。今回、何も知らなかったので、知ることができてよかったです。」とこの授業の効果を記述する内容がみられた。授業における生徒の様子や授業後の感想文の分析から、この題材を保育分野で行うことの有効性を実感した。

まとめと今後の課題

(1) 高校生の乳幼児に対する興味・感心を高め、乳幼児の心身の特徴をより深く理解するために、保育体験とグループ学習は効果的であった。乳幼児に対して特徴的な回答をした生徒の何人かは、

対人関係においてなんらかのマイナスの経験があった。これらの生徒に対しては話を聴くことのが大切であることがわかった。

⑵保育体験は高校生の自尊感情を高めるために効果があった。他の体験と比較して保育体験が有効であることが分かった。社会的スキルは１度の保育体験ではあまり効果がみられなかった。園児や幼稚園教諭、高校教諭にとっても効果があった。異年代が交流することの意義が明らかになった。

⑶他者を演じるという自発的な活動を通しての気づきから、自己と他者を客観的にとらえ、他者を理解することや問題に適切に対応しようとする姿勢が見られ、心理劇の効果が見出せた。

⑷感想文の内容から、生徒はＬＤやＡＤＨＤ等の発達障害の特徴を知り適切な対応の仕方を理解していた。授業で活用した疑似体験のプログラムは有効であった。児童虐待の予防だけでなく、自己理解、他者理解を深めるためにも効果的であった。

⑸ 感想文を分析することによって、生徒１人１人の、授業のねらいに対する理解を量ることができた。今後、個別に話しを聞き、ねらいの理解が低いようであれば、説明を加えるなどの対応が大切であると考える。

⑹ 授業の感想文を取り上げ、クラスで話し合う機会を持つことができれば、生徒の思考をより深めることにつながると考える。これについても今後の課題である。